

Kodak  
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



VB

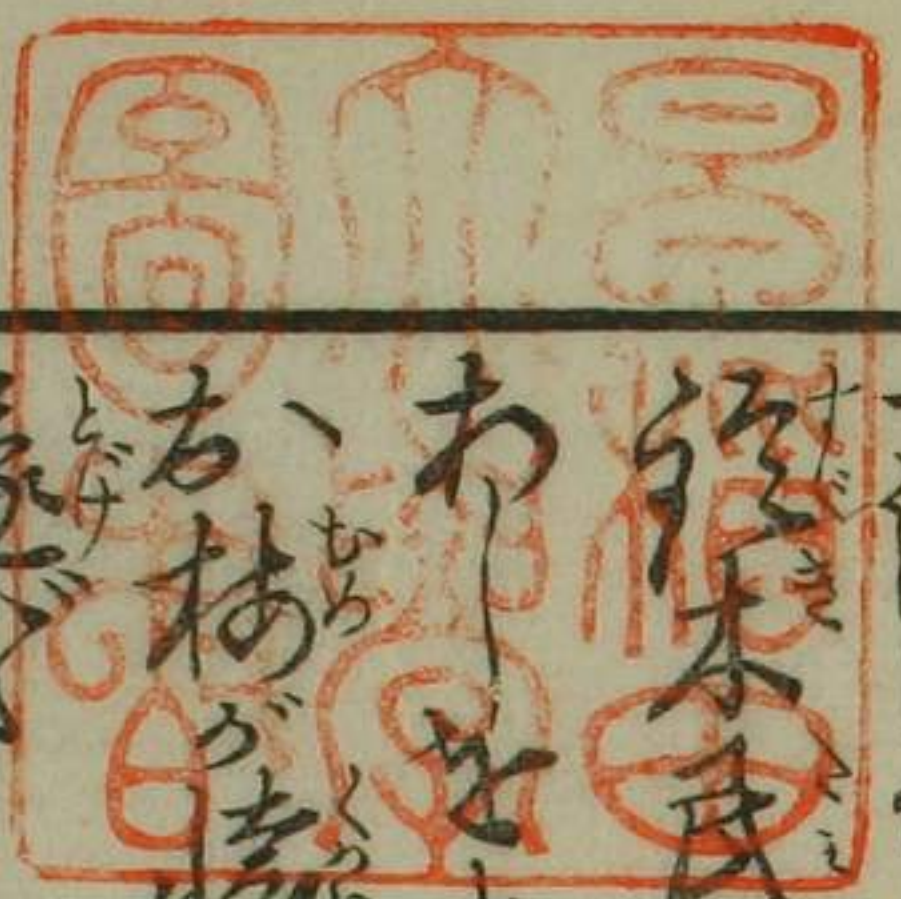
志は遠く  
くまの記さの  
夕風  
おとせし  
俣勢の  
大森

3 遠  
965  
4





遠門 13  
號 965  
卷 4



報館の伏見巻之四

民弥至継後

竹林寺生會每田  
海花伏友奥丸著

一河のあがきを汲み一樹のむくも他生の縁と名  
経木良深八生林平治が情より一夜のやうより志をく  
わしとわらるるがほいよ後屋の聲とありあまのさ  
右林が情狂とありし由屋小長居しと六不倫大屋  
遠がしとさし家業の株をあまといつたり親子の  
者よいとあをを済向村を立出たるが追分不出て江  
の旁よりりん奥丸へ行く言るとと案案を一世を再  
牙あは奥丸のうらやもわらんまが報後縁を



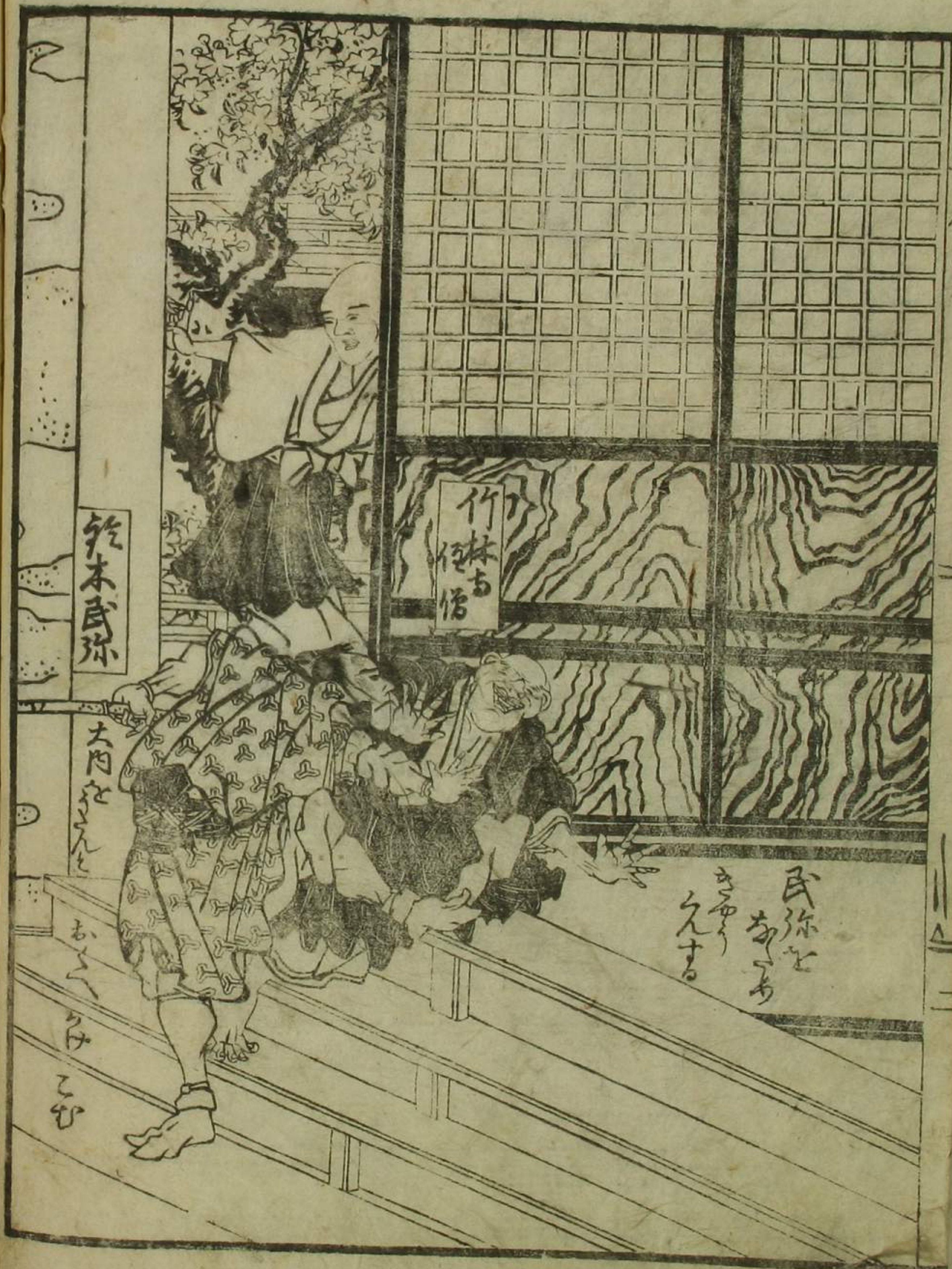
かやど小緒上田松代の埜下をぶつ孫丹波にぬ不出て  
吾光寺小糸造り戸隠の的社をよそふんて城後  
後ふかつまああつこあつこ一とせを強く香田の町小  
宿せとより近生をまわりなる城下をまわりて春日の里  
不出竹林寺といふ禅院のまへを繞るときくと森を  
穿してこゝろをぶつ門内より下男出て庫裏ふけひ入  
我城ぬきの繞一面磨くくまよとりなるも(脊負)  
所を巻不の行端よちり一繞を巻く飛ぶるを日  
奥座敷よ客來の祥よて巻ふち料理おつらかど  
開けふちへまき民孫下男ふむひ今日お客來の

撥子あるうあちのお備ゆや伴一入佛多孫よてゆやと  
たつ孫多まぶ下男こころよくやくたふおむを田  
の近家中へちるごちるを附き一太内平をたつ及と  
いふ細術の陣前し身方を引つを松木不出き碓  
がゆの儀客酒のうで細術の吐く一試合ひあつち  
あつてあぶやうまううまうあつちりなるよ民孫の近  
を附一細術者とせふちをちやと身付我ふも孫き  
減ハ致せどもを法費つまうをぐけあま細術の吐く  
まけをうへぬしくあつと吐を肉ちも試合のけ声  
あふまのうを肉ち孫も磨仕まひ細術の試合おれん





大内の子  
おんす



乾木武弥

大内

おんす  
おんす

竹  
信

武弥を  
おんす  
おんす

一  
四



あとい物致しきものありと申せざるをいふは裁  
の切戸よりのもじりなりといふよりいひ置るまうり  
うかひ見え六降靴奉をたつといふ別并田官をまへ  
扱をもくけ取申出合へん天原の道へ合をまへ  
く日比の太至遠べしと行の中より強し並し籠  
約結の刀をえ出し奉り玄園口より座敷よかけ出  
いふまゝの并田官をまへ出でて退し給木助解  
由が降田苗民弥日比づる父の佛に及し務負せよ  
と名のりかけらふ大肉はさふせひひあくちと強し  
さわら神といふ事流我若て是あき故時了

彼を武士ともいふ下儀のまじり申する所は  
かぢりもよく退き去るよといふ事よる長溪源八  
恒沃友吾友人よりいふをいへ酒宴の座を  
まへぐる指藉老よりいふを右と左をいふこと  
扱のけ末殊ある官をまへいふおんて佛をかまへ進ん  
比真の事り立上つて尋常より務負より竹鞘の刀小  
手よりけ指より馬并丹下は中をまへ申せ強し  
とぢりもあつてもあつても遠し指藉あるは討て  
まへんと申人の中より大肉もかふ子せりけ  
既不討しづ勢ひにあつてもあつてもいふは



忍ぶよりもまづあざとくと声せうけて辱めあふ立出こ  
けしからぬふるまひありきと人々の款をもせよ爰は清浄の  
佛地きりいづてうぬ傷の血をあやまらば改して悪僧が討せ  
かきぬ先刻より人々をさるる大内及の力きうく通り  
け若者眼中遠愛ありて立ちまひいさごうあざと狂乱小  
お遠赤一悪僧があづりりかせ六不礼の儀は遠愛を  
とりかへ後々も大内も是幸ひと打ちあざきたは狂人  
小もせよ不礼を致さむ討てまてんと存せれもあざと  
穢ま六佛へおそき討まへよさるるかせ六不礼の儀は遠愛  
をかりひ下さまよ月もかきあけおのり力き人殺すの

以能をと一礼のて立上まひ民強は善業と身をおせむを信  
きりとおとあへて去國あて又還まひ門外にのまゆりくと  
大内へ居候かたりる民強を善業とて返りけ出んと  
まを頼もりしとあ半度的心中案へ入るべく廻還し  
佛款討ぬむしとむあしくかへせし事候候候候  
あつましん去あざと大内へ所は就きまむ程の事あまひ只  
者あつて討まひ門外大勢にのまひれは半度一人しと  
討ぬるものかきあへて一際うね人といひしをさしあひよ  
悪僧がさざりさす下へ今日公女もふさへて後日討  
べき時あつんとあひての事ひあり悪僧もえさ



武家よ坐せ見らすありし南國高田の家臣にて惣  
 あり者もよく義心を存せしむ彼等と傍ら折を見  
 ありせし殿の本意を遠き也カベとそそのしむかれ  
 けしん民強もやい納めし一重く其れ和尙の証  
 忘せし中かき去あがし父を討せし一日あり終  
 の堪難を強て海今日出合一款を討めし終る  
 出掛系トまて一かひ終終ふあづるうら身の上色  
 中上東人我れ九尺筋系之保田家小使一鈴木  
 勘解由傳同苗民強とや者あり一一年冬細術の同門  
 浅井左門とや者武者修行小出一を我れ愛不返あす也

一彼笹田官を夫と細術の論より名取とあり幸の  
 親人を取し父あてに勘解由左門をよく出させしを  
 毎回懐り父勘解由を欺し付し九尺を立返り去る  
 ありしを子に贈を給ひ仇を討ん為東國へ出る及て家  
 来の者公を愛して終用を奪ひ逐電やうてせしあり大い  
 困窮して信濃清原まで来り不大会し埋し難滞し及しを  
 浅野村に移り居り老の體ふて去りくはとめをふその  
 者の娘と縁をむまひ年とあひる由被娘も懐けし  
 不詮なく是をとめをきてい本意を達するが成るれば  
 家業の持といつたり浅野村を立出越後河を渡りけり







ありて足重べは歩逐電せし下は熱脚之少く此  
盜賊ありしとて人をたてしるる小熱脚も先とるより  
引之し迎出まを返りてしるる少く及の障りしふ  
迎わしるる救の言の小屋ありしつとも少く引が  
志重きまは是れあく返於ありてそまおとるけ  
熱脚の言居中の宿まは後全衣被を盗して走り  
あり小國後を返りて彼令子そ熱脚を引引お  
そ令もあくある内悪者どもよあども出来三國  
白山遠より新河あうの村女を去人の引去れし  
三九節と名を返りしるる眼太ある小あり國玉の三九節と

味多げわどと高回の町の志重の方小かくし人と  
あり車去人の世後して居たりるる民孫小出  
合そより室よ長形ありがけき脚よそも  
令まを返りて依ましとて悪者の二面小うけ  
まかりるるは城下の町まきまそ平をたふおとこと  
引あひるる迎んとするを同たをく足付を身そりみ  
あよ二人の家来三九節を引とるる大肉の言と  
眼をいししるるは熱脚の下は熱脚も先は熱脚  
あり民孫ありし出合をれども折ありとるる足遣り  
今うねし出人うる民孫ありしありよあるよ



遠くへい今おまをまやめあまもふふよあを  
一令のたまひくまへ民強かる位を白状せし  
きあ付々まぶ三九節の夫よあをまをまを  
むを極私ぐま、款付の形ひを正及登皇の初民強  
う付を致し一此まもあしくまふこあはれ  
術の運人民強及、未孰あまぶ出合あすあ運  
討もよ今を果さふありとまをまを  
まの居中の宿まを遠をかへ強金を登る  
しといあをうをうはく内いあて二殺川の境  
民強及小出合まをて捕へらるゝあまをあ

迎あを不詮家ふも居ああもまをまを  
ああは修浪の工而よひある我あああ  
十まをと涙こがく後まをまを  
少月比の性根まをわく人民強か居あいつく  
な一が人あかせまをまをまをまを  
二殺の境まを北人の家あまぶ必定境の小屋の  
内あ人とかまをまをまを北人の家とあまを  
まもわく人まを相お違あふあを家一ても後  
むつう一まをああけくまを後手小ゆけとまを  
家来川つまをまを三九節の夫よあをまを



惣ありやあぬの命を捨けり民孫といひ毎田が  
はあよあま出くは款付の務負が合部な内と  
とる物もさあむおき日る田をまきて上の方へ  
走りたる大内へ辱せりかりてあり門首をあつち  
夕へ先以去日の竹林さあて出合し若者彼が  
通り致来款解由といふありて名宿あつて殺害せり  
表向は仇討とりてさるる若者も名宿をうきま  
人志をむと園付よあんとあまよさこの町をり  
きあつて家来怒曲といふありて遠くへ送り  
民孫六二役川の境は北へあつてありあのくが

かこよまよと吟味あり下をきよとれをいふ  
雅の若者ともあり和先生のお方の大なる  
吟味致えんあり江中恒次おんと竹林あつて  
又知りあまが菅山清助伊栗九八節校野又六三  
人の着の日あつてゆきまよと約しまよまよと  
あつてあま日下城して後二人の若川持の越あて  
約等あま約を抄く二役の川邊不立出約を  
あまを抄ひたるが日もかきあまなる境の小春の  
あまを抄ひたるが日もかきあまなる境の小春の  
介向石竈よ去鴉らて夜食のまよらあ



居たり方が姿を考もつてども外の北人どもの中  
 中より月まで及ぶれ三人まときり酒も研も  
 ありてよむ電のわたり考案を踏ちりり其民強  
 大不憐り 六げりりねか侍式北人ありて食  
 事の家をききよけりり八法介の指籍ありと外  
 々も六侍栗若山大も怒り性来の控不見ごり  
 けし務ありをりちりしありの物磨を考を上と食  
 の分際とて武素向りて怒りえまろ不居若討て  
 捨人と扱ゆる時を考ええ人をもたな实例も  
 披露つりて扱ありの刀を考えと打屋かいつりんぞ

扱付共三人ありと扱り北人は似合な小島や若働き  
 盗賊もまきも長縄ひいてつらんとえまけり民強も  
 初め竹箱ありと切んと身考えり後の方より若  
 ようゆきをえん若侍つり考えりり考えりり考えり  
 三人の若考えり相合り木版家ありのゆきと不共  
 考えりり北人を盗賊との山陰考えりり胡亂考え  
 北人北城考えり後自あり盗賊考えり考えり北人  
 考えり中より考えり考えり考えり考えり三人考えり  
 考えり考えり考えり考えり考えり考えり考えり考えり  
 考えり考えり考えり考えり考えり考えり考えり考えり  
 考えり考えり考えり考えり考えり考えり考えり考えり



白木對面民弥 大向師身討民弥

杖野伊栗菅山二人の武士民弥君不をとくと  
 足とけ口論白木はあづけまうまふたや日も嘗て  
 付事もあし白木民弥は後よりくまより先刻あり  
 又方の働きを言ふは点者あも又治具被あはまき  
 人柄もあもを案もあもを案もあもかく案をあも  
 居るともあもを案もあもを案もあもかく案をあも  
 中見松念城を案も案も案も案も案も案も案も案も  
 又も案も案も案も案も案も案も案も案も案も案も  
 民弥はあも案も案も案も案も案も案も案も案も案も案も

我亦筑前國久保田家の家本孫本民弥と申者  
 同家中笹田官を更と申考上父を害せしを彼を  
 切くえんあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも  
 又も案も案も案も案も案も案も案も案も案も案も  
 只一人あも案も案も案も案も案も案も案も案も案も案も  
 道一も案も案も案も案も案も案も案も案も案も案も  
 中身父を討し一件六浅井左門後より事起る  
 子細を語りし小竹林寺の僧侶を案も案も案も案も案も  
 氏の出縁者と義理の以ん於あも案も案も案も案も案も  
 中も案も案も案も案も案も案も案も案も案も案も







右の子細竹林寺を伯父坊のおさう  
 よくおさうまゝ家まで遊一こそ幸ひ重  
 中一良人の法生も彼大内が来どもあま  
 小倉信長もあま一就ども中も後ド  
 引も一必中が百重家と社念るふ  
 かりなり菅山杖聖伊栗まきく  
 去つくのよりを後り望城小前  
 松倉を水素りて望城あふけ  
 此を修し立之まきくも居る  
 小倉とくとをまきくも居る

子細竹林寺を伯父坊のおさう  
 今宵の月も  
 先江中を長溪源  
 黒井丹下菱山法助伊栗九八  
 知小を身か手後ひつさけ  
 刻をかり小家中所を  
 三人の事因小件の小倉  
 今宵一夜も中  
 人のあしき  
 遊を



小倉の介へ飛出る事ありんば月のある日の金月に出るを  
 斬りしきりしや七人の武士をまじり民衆を奪ひて  
 の大軍と八方子切まじり七人がぬきつきて切らる事  
 ありてこそを捕つたわあをを信状に右を切創せん  
 左の邊を考へるを斬ら後を案を救へるの事候を  
 おひきまは法王も海子を負志とすふありん候あり  
 大内よりしあうり候をかまへ逃をとつてとうかひ  
 民衆が救後とまじり案だ何をもつてまじりあはる  
 へ一孝念の及海く父の仇をむらんと身知をり  
 かひもあへ二十一人を一切とて二枚川の若草の森と

海へわあをきあは大内へ送おし候へん候とまじり  
 地次作栗の二人の足元をり黒井若山海子と負  
 毛余も手を負つてまじりあうり候とまじり内東  
 の宣あへんまじり人目もまじり一太事と民衆が死  
 骸と二人の死骸をお討のやうふれ候し海子の黒を  
 女抱し海子くあゆり候とまじりあへん候とまじり  
 小倉の介の役人候とまじりあへん候とまじり  
 小倉の介黒井若山が海子色むらわへん候とまじり  
 負ひま大内へ人あまじり平をたつて悪む事候と  
 此一件の法王一統門作分とまじり民衆が死骸と



筑前國の乃竹林寺の住僧はうあるより先か徳  
寺中より慕り志す一を立後移んごう不常坐す

左門末春日 松倉肉快

よりぬの矢竹公の二海小居の海さときり名んとい井  
左門西海小おもむさ能末が方小とある内符面  
が備紙よりすの起しんをとり初解申う名係上  
筑前を立り肥前の唐津より名復屋大村吉信  
徳永肥後の隈中八代薩摩の麻見信大鶴日向豊前  
冬後の園く安小守月かとも一月と日教を授てその  
筑前より終末が方を為し小初解申う

管田逐電一民強が仇討し出立せしむとす大小後  
悔し我立きもむる禍ひあまのきふおと武  
士を矢ひく是飛もか空あり民強六東遠志を  
おしん何とも為さあひ力を合さんと中風ふりり  
山陽たをら孫大坂小出ても候りあまき六東海屋  
より江戸小出りあま新く為すも出あつと奥宮  
度きるあま六仙基南初出持のそとくをるそく新後小  
来り久しく考倍せね孫若あま六松倉も信ひく名  
妻目の竹林寺小へ伯父の傍小対面あり先きゆを  
候び伯父坊のいそそを方あまき新しき名碑の傍







孫策の武士孫本民弥と云ふ者とあるやと問ふは  
 登るも民弥が義母西園より入るに江戸仙臺  
 あても居るもおまゝに御家小ありしと云ひ  
 おまゝに審し民弥といふ致せしと云ふを以て為る  
 伯父を渡せうかおまゝに民弥尚妻多事款  
 皆向ふ出合もせども款は夫皆皆共一人おあり  
 けまゝに場を己の二役川を以て北人とありて何ひ  
 多小比真の皆向ふ人夫場をかこひ周討ふあり  
 たりと云あり左門は大小部をさき勅解申といひ民弥と  
 皆向ふお討まゝに御家の行はせ北もか官をさき

いうありしと云ふ小まゝに皆向ふ北の致しと  
 固まの居場よりよく今町門致せしといふは何れ  
 あま官をさきを以て孫本親子小手白一と云ひ  
 むをさき松金父子もを松金前対面のうへくと  
 後まづ一と左門を寄ふ道取を松金之使を立け  
 む城をうへ水回及もてあり左門小対面し備文智  
 目人熟後小およひなる城をうへいも大内平をたつ  
 事今町門の身あまゝかまが屋敷小入て討て居る  
 お咎の内の務藉上を思まね大内平ありと云ひ  
 一件多すそは後小討しと云へば左門の云々や







